

真壁城跡の国史跡指定を振り返って

加藤, 順一
元真壁町教育委員会次長

<https://doi.org/10.15017/1523910>

出版情報：歴史を歩く時代を歩く：服部英雄退職記念誌：とことん服部英雄，pp.278-279，2015-03-31．九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン：
権利関係：



真壁城跡の国史跡指定を振り返って

加藤 順一

茨城県真壁郡真壁町は、東京都心から約七〇キロメートル、関東平野にそびえる筑波山の北麓に位置する、人口約二万人の小さな田舎町である。平成一七年に三町村が合併して現在は桜川市真壁町となっている。

真壁氏は、常陸平氏の一族が真壁郡司職を得て、平安末期に土着したことが端緒とされ、以来四百年以上の長きにわたり、真壁地域の在地領主として戦乱を生き延びてきた。近世には佐竹氏に従って出羽に移り、明治維新後は関東に戻って、現在の当主は三十四代目となる。真壁文書、庶子である長岡文書をはじめとする豊富な中世史料が残り、早くから中世武士団研究のフィールドとして知られてきた。これから述べる内容は、この真壁氏が居城とした真壁城が、国指定文化財（史跡）へと進んだ当時を振り返り、現場に立ち会った者として幾何の雑感を加えるものである。

師走の声を聞くと、筑波山の麓も秋から冬の風が変わる。真壁の城跡には今年も多くの人々が集まり、足下に顔を出したばかりの遺構や遺物に思いをめぐらせている。年が明けて二月に入ると、ひと月で十万人の観光客が真壁を訪れる。中世由来の町割りに、登録文化財の商家が建ち並び、店舗に飾られた雛人形で人々をもてなすのである。

今から二一年前の平成五年、暮れも押し詰まった一二月二七日の夕方、文化庁から一本の電話が入った。真壁の町から鉄道が消えて七年目、近代の地元経済を支えた石材業も勢いを失い、地方衰退の波に飲み込まれようとしていた。

さて、電話の主こそ服部英雄先生であつた。真壁城跡を国指定文化財（史跡）

にすべく、申請する気はあるか、という趣旨であつた。

真壁城跡は広範囲に遺構がよく保存されていたが、本丸のごく一部が茨城県指定史跡となつているだけで、真壁町は総合公園として城址公園の大規模な整備事業を計画、ほぼ全域約一〇ヘクタールの用地買収を進めていた。

平成五年夏には真壁城址専門委員会を設置して学術的な意見を求める体制を作つた。服部先生にもご来町いただき、城址公園整備計画について講演をいただいたが、この時点では本格的な発掘調査に基づく史跡整備を目指していたわけではない。国指定史跡を目指すには、大きな方針転換を行う必要があつた。

しかし、事は急を要した。三月の文化財保護審議会に間に合うためには、申請書の提出期限は二月一六日、ひと月半で政策変更の決断、同意取得、書類準備を終える、というスケジュールが必要となつた。

すぐに上層部に報告、翌日から年末年始を通して内部協議を進め、正月六日には服部先生にご来町いただいて町三役と直接協議、先生のお話を聞いて、平間小四郎町長は国指定文化財を目指すことを決断した。

だが、急な方針転換に庁内協議でも異論が出る状況で、議会説明は困難を極めた。一月末には再び先生に足を運んでいただき、議員全員協議会での説明までしていただいた。

詳細は省くが、期日ギリギリの二月一六日、我々は何とか書類を仕上げて文化庁に向かい、夜遅くまで待つていただいた服部先生に指定申請書を手渡した。果たして平成六年一〇月二八日、真壁城跡は国指定史跡となつた（文化財保護審議会

の答申を得たのちに官報告示された。^{＊服部注1}

おそらく、こんなに手間のかかった市町村はなかったのではないかと思う。手元のメモには、「これは服部先生個人の見解なのか、文化庁の見解なのか」という議員の声が記されている。先生の熱意なくして、真壁城跡の国指定は無かった。真壁城跡の現在は、服部先生によってある、と言わなければならない。

先生が初めて真壁を訪問されたのは、真壁城跡の保存に関わるよりもずっと以前のことと伺っている。石井進先生のゼミに入られて長岡文書（現在は原本が発見され、茨城県指定文化財「真壁長岡古宇田文書」となっている）を研究されたのが縁の始まりで、昭和五〇年代には圃場整備の迫る真壁へ入り、地名の聞き取りなど丹念な調査が行われている。真壁城跡の国指定記念シンポジウムでは、当時、長岡ゆうさんの家に泊まれた思い出も紹介いただいた。

真壁城跡が総合公園として開発されるか、文化財として残されるか、という重要な時に、服部先生に文化庁で真壁を担当していただいたことは、我々にとって本当に恵まれたことであつた。改めて深く感謝申し上げたい。

記念シンポジウムの挨拶で平間町長は、五年、一〇年にわたる長期の整備が始まる、と述べたが、その後、真壁城跡は二〇年を超える発掘整備事業が現在も進行中である。

真壁城跡の国指定をきっかけに、真壁町は歴史資源を生かしたまちづくりへと大きく舵を切り、歴史の町として知られるようになる。平成一一年には城下に残る百棟以上の伝統的な建物を登録有形文化財とし、その町並みは平成二二年に国の重要伝統的建造物群保存地区となった。

真壁の人々は、郷土への誇りを取り戻し、我々の町は歴史の豊かな町だ、と自信をもつて語るようになった。四百年の時を超えて真壁城に息吹をもたらし、そして真壁の人々にエネルギーが満ちてくる、その重要なチャンスを与えていただいた服部先生に、心から御礼を申し上げたい。

時は流れて、平間町長は八年前に世を去った。その少し前には、服部先生をお招きして当時を思い出しながらの食事をさせていただいた。先生のお力によって真壁の町が変わったことを、亡くなる前に、どうしても感謝したかったのだと思う。今冬、長岡ゆうさんも鬼籍に入られた。真壁の歴史研究を陰で支えた方々が去り行き、寂しい限りである。

しかし、真壁の歴史は残った。そして、これからも永遠に受け継がれてゆく。それを確実なものとするため、真壁城跡の発掘調査整備事業は、人員を増強して続けられている。

このたび、九州大学をご退官との報に触れ、真壁城跡もあれから二〇年の時を過ぎたのかと、懐かしく振り返らせていただいた。

（元真壁町教育委員会次長）

＊服部注1

真壁城本丸には前町長時代に大きな体育施設が建てられた。施設建築前の美しかった本丸を知るものとしては、悔やんでも悔やみきれない。平間小四郎氏はそれに先立つ発掘調査に、作業員として参加していた歴史好きである。平間氏が真壁町長になって、城跡整備検討委員会が設置され、歴史を感じうる方向への整備が模索されていた。会議終了後、平間町長が国史跡指定を受けることが自分の悲願であると訴えた。中心部に施設があつては保存状況がよいとはいえず、通常ならば史跡指定はむずかしかったが、改築時の撤去は約束するということであつた。

急遽方針が転換された。既定路線にもとづき、すでに予算が執行されてもいたし、議会の同意は得られなかった。一月三一日全員協議会における説明は功を奏しなかった。けれども議会の同意がぜったいに必要とされていたわけではない。町長の専決事項で史跡指定申請書が提出され、茨城県教育委員会から進達された。鉄は熱いうちに打たなければならぬ情勢にあつたのである。なお一月三〇日前日に真壁入りし、白井と桜井の境界・山中にある降雨集水施設「ホッキリ」を現地踏査したと、加藤氏はいっている。